

## 二〇〇一年モロッコへの旅

——フェズとカサブランカにみる女性の生活——

坂本祐子

はじめに

アツツアイと呼ばれる飲み物がある。

黄金色をしたこの液体は、いわゆる煮出しミントティーだ。中国緑茶、ミント、それに砂糖を入れた銀色のポットへ熱湯をそそぎ、これを弱火にかけて作られる。途中、何度か試飲して味を調えたのち、耐熱グラスへ濃さが均等になるよう注いでいくのだが、この分配作業はグラスの口から十センチ以上離れた高い位置で行われるため、ある程度の腕力がなければ優雅にこなすことが出来ない。

芳香性・刺激性ともに兼ね備えたアツツアイは、モロッコで最も一般的な嗜好品である。家庭で、職場で、通りで、喫茶店で、人々がこれを口を含むなり相好を崩すといった光景をよく目にしたものだ。ある男性は愛着を込めて「モロカン・ウイスキー (Moroccan Whisky)」と称していた。また、嗜好品のみならず薬の作用もあり、喉の痛みや腹痛に効き目がある。私が見たところ、同じ嗜好飲料でもコーヒーは主に成人男性によって消費されていたのに対し、アツツアイは

子どもや女性にも広く親しまれていた。

緑茶の中にミントを茎から葉まで丸ごと入れる、これだけでも十分馴染みのない味だ。さらに、コーヒーはブラック・紅茶はストレートを基本にしていた私にとって、アツツアイの執拗な甘さはどうにも受け入れ難かった。そこで砂糖を加えていない状態を店で注文してみることにした。訝る店員の制止を振り切つて臨んだ無糖アツツアイ。それはもう、たまたまなく強烈だった。苦い上に生臭い。それまで砂糖とバランスを保っていたミントの個性が、砂糖の不在によって猛烈な自己主張をしているのだ。むしろ、ミントが緑茶を蹂躪していると言つても過言ではない。不快な味に、後悔の念が止めどなく込み上げてくる。しかし、すぐに音をあげては独断を遂行した手前、こちらもばつが悪い。自業自得を悔やみつつ、グラス半分近くまでは何とか容積を減らしていった。

このように試行錯誤をくり返して挑んだアツツアイは、私にとってモロッコにおける登竜門そのものであった。そもそも、異文化の中へ飛び込むという参与は、あらゆる衝撃を体全体で受ける行為に他ならない。当然、価値観の相違は齟齬をきたすであろうし、言葉の壁や生活習慣の違いから双方に軋轢が生じることもあるだろう。そういった面も含めた上で、予期せぬ戸惑いもフィールドワークの醍醐味であると考えていた私は、これから受けるであろうその衝撃を、世界観や歴史観のような口角泡を飛ばす議論に違いない、と決め込んで過剰に身構えていた。それが、である。グラス一杯のミントティーだったのだ。

たかが一杯、されど一杯。

アツツアイはモロッコでの暮らしに欠かせない必需品だった。なぜならば、それが女性社会における潤滑油の役割を果たしているからである。私が訪ねていった先、あるいは招待された先では、決まってアツツアイが出された。媒介者たるアツツアイを淹れられるようになれば、一人前の女性も同然である。少女たちは年上の女性に連れられて顔を出し、社交への参加経験を積んでいく。そうした一環として訪ねた先が初対面やこれといった面識がない家でも、アツツアイを飲ん

で一息つけば自然とうちとけ、親近感がわいてくるのだ。こうした和みの効用を「アツツアイなくして歓待なし」と断言して差し支えなからう。より多くの住宅を訪れる必要があった私は、他の生活習慣はともかく、アツツアイの味に慣れることが一番の課題となった。

飲み続けること一ヶ月。私はアツツアイの味に順応し、やがては好んで飲むまでに急変した。人間の味覚とは不思議なものだ。最後まで食べることが出来なかった料理もあるというのに、アツツアイは当初の拒否反応がおかしいくらい好きになった。そうなるに至るまでの経緯を、これから報告していきたい。

モロッコ滞在は二〇〇一年六月二三日から八月二七日までの約二か月間である。フィールドワークと呼ぶにはあまりにも稚拙な調査だが、未熟だからこそ見ることでできた一面や、発見があったのなら幸いである。なお、いくら拙い観察とはいえ卒業論文の資料として用いたため、ここでフィールドワークについての了解事項を三点ほど付記しておく。<sup>①</sup>

第一に、世の中は多声的かつ重層的である。したがって、フィールドワークがもたらす理解は部分的なものでしかありえない。あまつさえ、それは観察者の出自や立場、知識や関心が影響した私的な見解である。第二に、対象人物の記述では仮名を用い、敬称は省略している。第三に、会話は英語とアラビア語モロッコ方言で行った。状況に即して一部原語を補足してある。

## 一 いざ、モロッコへ

ところで、なぜ私はモロッコへ行くことになったのか、そのいきさつからはじめよう。二〇〇一年四月、私は卒業論文のテーマを「中東地域における日常生活の近代化過程」、すなわち〈歴史をもつれ合い〉の解析とし、<sup>②</sup>中庭式住宅に焦点を当てることに決めた。今日の生活において中庭がどのようなように使われているのかを知るには、実際に自分の目で見た

ければわからない。加えて、オリエンタリズムに拘泥していた私は、そこから脱するためにも現地へ赴く必要があった。<sup>(3)</sup>これらの理由から、一念発起してフィールドワークを実施する運びとなったのである。

目的地フェズでは、この地に長期滞在の経験を持つ方の紹介により、マフムード一家に居候することができた。彼の一家は夫婦二人に子どもが七人の核家族なのだが、常に近所の親戚が出たり入ったりしている。また、遠方からも親類が頻繁にやって来るため、随時十五人程度の人間がいることになる。私の滞在中は夏休みだったこともあり、カサブランカから親戚の二家族が遊びに来ていた。この家族と交流を深めた私は、マフムード一家の計らいで帰国前の一週間をカサブランカで過ごす幸運に恵まれた。こうして居候した三家族の家族構成は次の通りである。(一)内は当時の年齢。

① 世帯主 マフムード

妻 ナミア

長女 イクラム (十八)

次女 ゼイナブ (十七)

三女 ファティマ (十五)

四女 リダ (十四)

五女 ナフィーサ (十三)

長男 ブシャイブ (十二)

次男 ヤッシン (二)

② 世帯主 ハキーム (マフムードの弟・カサブランカで工場を経営)

妻 ライラ（ヌズハの姉）

長女 ナーイマ（十九）

次女 アイーシャ（十六）

三女 ハナ（十三）

長男 ヘイタム（十）

四女 サファ（一）

③ 世帯主 アブダッラー（カサブランカで公務員の仕事に就いている）<sup>(4)</sup>

妻 ヌズハ（ライラの妹）

長女 ハジャ（九）

次女 ナジラ（七）

三女 ヌハイラ（三）

最後まで年齢を覚えてくれなかったが、察するところマフムードは四十代半ばから後半であろう。両親は既に他界している。ハキームのほかにも兄弟がいて、兄、姉、弟、妹の一家と会うことができた。妹のラティバ一家はすぐ近くに住んでおり、彼女は最初の夫と離婚後、ナミアの弟と再婚している。

フェズはモロッコの内陸部に位置する古都で、その起源を九世紀まで遡る。学問や文化、商業の中心都市として長らく栄えたが、二十世紀に入ってフランスの支配を受けた。フランスはジグザグの道路網に代表される旧市街（メディナ）の外に、自国の理念に沿った区画と道路で形成する新市街（シテヌヴェル）を建設した。<sup>(5)</sup>

旧市街で生まれ育ったマフムードはここに小規模の喫茶店と呉服店を経営しており、同時に政府公認の絨毯販売員でもある。親分肌のところがあつて、小柄ながら恰幅の良い体格が堂々たる風格を醸し出していた。そして、彼の見識はたつき上げらしい通俗的な解釈に満ちている。だからこそ、モロッコ人の心境を解説する言葉には現実味があつた。その特徴として、何か決断を下すときや自己主張に、伝統を引き合いに出すことが多々あつた。長女のイクラム曰く「父は頭が古い（カディーム）」とのこと。

さて、アツツアイと悪戦格闘しているうちに、何日か経った。

ひとたびフェズの通りを歩くと、「ジャポニ」やら「ヤーバニー」（アラビア語で「日本人」）、意表をついて「カラテ」などと声をかけられる。そのほとんどは青年からであるが、女性は声にこそ出さないものの、ここに挙げた文言に相応する視線を私に投げかけてくる。

そんな数ある呼び名の中でも、なぜか「ナカタ」が一番多かった。ナカタとはイタリアのセリエAで活躍している中田英寿選手を指している。彼らは、子音+母音「ア」が三つのナカタは問題なく言えるのに、子音+母音「ア」二つと「オ」二つの計四音節から成るサカモトはどうも上手く発音できなかった。ちなみに、正則アラビア語では母音「オ」が存在せず、「ウ」がそれにとって代わる。ユウコ・サカモトを「ユウコソ・カモット」と発音するので、私の耳には「ようこそ、モロッコ」に聞こえた。

## 二 いざ、語学学校へ

「わざわざ学校へ行かずとも、俺と俺の家族がアラビア語を教えてやる」  
マフムードはこう申し出てくれるのだが、そうもいかない。

私は、フィールドワークを円滑に進行すべく、語学学校で口語アラビア語モロッコ方言の短期コースを受講することにしていた。確かに学校はお金がかかる。けれども、それなりの利点もあるのだ。それに彼も商人である。単純に学校へ通うことが不憫に思えての配慮かもしれないが、キャンセルすると口にするなり、じゃあその金で絨毯を買わないかと打診してくる可能性もある。

結局、学校に否定的だった彼も全面的に支援してくれた。最初のオリエンテーションに随行した上、バスは危険であるとの判断のもと、タクシー通学を手配してくれた（以前受け入れた日本人が通学途中にスリにあったため、万全を期しての策であろう）。彼らによる過保護的気遣いの甲斐あって、私はモロッコ滞在中に自分の不注意から失敗したことは何度かあったものの、盗難に遭わずに済んだ。詐欺の類にも一切遭遇しなかった。これはひとえに、注意を喚起し、防衛線を張ってくれたマフムードとその家族のおかげである。

私が通ったALIFこと、The Arabic Language Institute in Fez はアメリカ資本が創立した語学学校だ。昼間は外国人がアラビア語を学び、夕方からはモロッコ人学生が英語を学ぶ場所である。かつてフランスの保護領だったモロッコでは、フランス語が生活の中に浸透している。<sup>(6)</sup>小学校からフランス語教育を始めるため、子どもとの会話でもごく普通に「ウィ」や「メルシィ」が出てくるほどだ。しかし、近年、英語が重要視されるようになり、英会話を習う生徒が増えた。もちろん、英会話学校に通うことができる生徒は、もっぱら中流以上の子女に限られる。こうした外国語教育の取り組みに比して、正則アラビア語の力は年々低下しているとの指摘を耳にした。

ALIFでは韓国人の友達<sup>(7)</sup>ができた。そのオッキョンが私の居候先へ遊びにきたとき、女性同士十人ぐらいで四方山話に興じていると、話題が信仰へ及んだことがあった。ムスリマである彼女たちは、私とオッキョンに質問を投げかけてくる。日頃、神について曖昧な態度をとっている日本人にとって、これほど答えにくい問いはないであろうし、殊に私においては言葉に窮してしまった。そんな中、クリスチャンである彼女は「神は唯一の存在だと信じている」と朗らかな表

情で語り始めた。その場に居合わせた全員が共感の視線を彼女に送ったのは言うまでもない。歯切れの悪い私の言葉とは対照的に、オッキョンの言葉が彼女たちの心をつかんだことは一目瞭然だった。<sup>(8)</sup>

そのときまで、彼女たちに信心深い、あるいは宗教的と思われるような面は見受けられなかった。「イスラームは美しい(ジャミーラ)」、という発言を何度か聞いたことはあった。だが、祈りを五回とも実行しているわけではないし、子どもたちに至っては、祈る姿をほとんど目にしなかった。既婚女性は、空いた時間に小さな絨毯を敷いて祈っているようだった。ある日、ナミアがお祈りをしている最中にも子どもたちが騒いでいる。そこで、私はおこがましくも注意した。

「お母さんがお祈りをしているではないか。静かにすべきだ」

すると、皆は不思議そうな顔をしていた。何も祈りをないがしろにしている雰囲気ではなく、あくまでも個人的なもののみなしている様子だった。

他の生徒について紹介すると、ベルギーから赴任しているソーシャルワーカーの話は興味深かった。彼女の話によると、近年ベルギーでもモロッコからの移民や労働者が多く、その分トラブルも発生しているという。業務は帰国後のアフターサービス等で、男性に比べ外国語が流暢ではない女性たちの対応をするため、A L I Fで学んでいるのだそうだ。授業では、講師が風俗や迷信についても話をしてくれた。居候先と違う視点から意見を聞くことができたので、彼らの講義は非常に有意義だった。

授業で言葉は覚えたものの、とにかく発音が大変だった。こちらとしては正しい文法で話しているつもりなのに、発音が悪いためになかなか伝わらない。ナーイマが親身になって特訓してくれるも、喉の奥をこすらせて出す無声音(ㄱ)と、うがい音(ㄱㅎ)は、ついぞ体得できなかった。何事にも器用な彼女は喉鳴らし「アラララララライ」にも秀で、高らかに響き渡るこの芸を会得しようと、年下の少女たちは彼女に手解きを受けていた。

そうこうして簡単な日常会話を覚えると、世界ががらりと変わった。対応が全然違うのだ。たどたどしいアラビア語で



も、何もわからない観光客だと軽んじられない程度の威嚇を相手に与える。また、こちらに対して好感を抱いてくれる契機にもなる。フェズの新市街でミネラルウォーターを買おうとアラビア語で注文した際、それまで無愛想だった店の親父が破顔一笑「シユ克蘭」(ありがとう)と見送ってくれたときは、私の方がびっくりした。

### 三 女たちの日常

マフムード家には女が多い。特に、前述のカサブランカの一行が遊びに来ていた間は、女ばかりだった。ここで、三世帯それぞれの妻について詳しく描写したい。

ナミアは私の滞在当時、三十代後半。マフムードとは二十歳前に結婚した。常に穏やかで、私の知る限り声を荒げたことがない。毎日の生活費は夫からもらっていたので、家計は彼が握っていることになるが、自分にもへそくりがあるのだとこっそり教えてくれた。ライラはカサブランカの出身で、フェズから出てきたハキームと十六のときに結婚した。夫の兄嫁であるナミアとは歳が近い。きりつとした姿から「おかみさん」の印象を受けた。最近では工場を経営する夫のスペイン出張へ同行しているという。その妹ヌズハは三十代前半。近所に住むアブダラーと二十代前半に結婚した。背が高く体格がよい。踊りが得意な上、ぐいぐいと引つ張っていく牽引力を持ったムードメーカーであるから、どこでも人気者だった。ヌズハとライラは姉妹ということもあるが、数ある親類関係の中でこの三人が結束を固め、良好な関係を保っているのは互いに肌が合うからであろう。また三人とも、子どもからは「ママ」、夫からは名前で、友人、知人からも名前もしくは「ラツラ・」(女性に対する敬称。男性には「シツ・」を使う)と呼ばれていた。

私が居候していた期間中の彼女たちの一日を追ってみる。起床↓朝食の用意↓掃除・洗濯・買い物・昼食の用意↓昼食↓休憩(他家訪問など)↓軽食↓掃除・その他の家事↓夜食↓就寝。彼女たちは都市部の中産階級に属するので、このよ

うな生活サイクルで暮らしている。したがって、共稼ぎや労働者階級の家、あるいは農家の女性たちはこれとは違った一日を送っていることになる。

右の時間割からわかるように、一日四食である。軽食は「おやつ」ではなく、文字通りの「軽い食事」だった。女にとって料理は重要な仕事である。一番手の込んだ食事は昼食だ。量や品目が多いだけでなく、肉と魚を中心とした献立になっている。マフムードとハキームがいったん昼食時に帰宅して食事をとり、それから職場へ戻っていたことから、昼食の重要性がわかるだろう。そして、どの食事でもトマト、茄子、玉ねぎ、ジャガイモを使った料理が食卓に上がっていた。よって、これらの食材が台所から消えることはあり得ない。主食のホブズ（平たいパン）を家で焼くところもあったが、ほとんどは店で買っていた。フランスパンもよく食べられる。驚いたことに、内側のフワフワした部分を「おいしくない」「ここを食べたら太る」などの理由で取り除く人が多かった。

どこの家の台所にも冷凍庫付きの冷蔵庫がある。だから普段は食料の保存にさほど気を使う必要はない。しかし、マフムードの家に集合した親戚の子どもたちが冷蔵庫に群がり、こぞって冷房代わりにして遊んでいたら、とうとう故障してしまった。修理が終るまでの間は、下の住民や親戚のところで冷やさせてもらい、急場をしのいでいた。

料理の腕如何によって評判が決まる。それゆえ、客人へ出す料理は相当に気を使うのだろう。鶏肉と羊肉を食べられない私に、彼女たちも手を焼いたようだ。私としては肉が食べられずとも他のおいしい野菜料理を堪能できるので、手をつけなくても支障はないと考えていた。だがナミアは、肉料理に手をつけない理由は味が悪いせいだと気を落としたらしい。原因が判明してからは、私に合わせてわざわざ魚料理を拵えてくれた。

先に紹介した三人の妻とも料理が上手い。お互い情報を交換し合い、工夫を重ねていた。娘たちもまた料理が上手い。特にイクラムとナーイマは新しい献立も身につけようと、テレビの料理番組を熱心に観てはメモをとっていた。イクラムは自分の担当する番になると「今日は私が作る」と事前に伝えてきて、食後に「味はどうだったか」、「見栄えはどうだったか」

たか」と、感想を求めてきたものだった。

マフムード家では家事に役割分担があり、当番制だった。踊りが好きなゼイナブは音楽を大音量にして掃除をする。掛け声にあわせてクッションをパンパンはたき、ステップを踏みつつ床を掃く。掃除自体が一つの舞踊になっていた。概して家事は一通りこなす娘たちであるが、姉妹たちが他のことで盛り上がっているときにたまたま当番だったナフィーサが、気もそぞろな様子で食器を洗った結果、仕事が雑になり、後で母親からやり直しを命じられていた。ハキーム宅でも、同じ理由からハナがふくれ面で掃除をしていたことがあった。【写真2 床掃除を手伝うヤッシン】

娘たちは基本的に父親の許可なくして外出出来ない。買い物は、母親と男兄弟がこなす。マフムード家では長男ブシャイブが買い物の荷物持ちをしていた。日課である母親との買出しは仕方がないとしても、突発的に発注される姉の使い走りには気乗りしないときもあるようだった。しかし、拒否して駄々をこねようと、姉に一喝されれば行かざるを得ない。そうになると彼の友達までもが巻き添えを食ってお使いに走っていた。

こういった彼女たちの状況は、欧米人から「鳥かご」に喩えられることがある。これは、ある意味で正しく、ある意味で正しくはない。正しいとする論拠は、やはり戸外での活動に制限がつくからである。いつでも、どこでも、誰とでも、とはいかない<sup>(10)</sup>。反対に、正しくないとする根拠は、彼女たちが単に受身だけの存在でないところにある。日本から来た私にしてみれば、自由に外出できないことを窮屈に感じるが、彼ら／彼女らにしてみれば、未婚女性が一人で海外へ行くことの方がよっぽど不思議なのだ。女性たちは隔絶した世界にいるわけではない。個人個人で観ると、これは至極当たり前なのだが、各家庭にはそれぞれの事情があり、いくら子沢山であつても、上の子がある程度大きければ家事をこなし、下の子の面倒をみる。時間に余裕ができた母親は心置きなく社交へ繰り出せるのだ。また、経済力もさることながら、家風も大きく影響する。風紀にゆるやかなところ、伝統に固執するところでは規範も様々だ。

ライラとナーイマの親子喧嘩から飛び火してライラとヌズハの姉妹喧嘩になったことがある。それは二家族がフェズに

来ていたときに起きた。娘の、母親へ対する反抗に端を発し、そこに姪をかばって叔母が介入したのである。仕事でカサブランカに残っていたハキームは不在だったが、大柄なアブダッラー、滞在中の家長マフムードの制止をも振り切るほどの乱闘だった。

マフムードの妹ラティバには子どもが七人いる。うち、上の息子三人は前夫の子で、それぞれ、二十、十七、十六歳だ。マフムード家の上の娘たちと同じ年頃である。実父がいない彼らはマフムードを慕っている様子で、特に次男は伯父と毎晩トランプをするため、十一時頃でも訪ねてきた。彼女たちにとって、小さい頃から親しんできた従兄弟は、信頼できる身内である。それとともに、秘密を共有することができる友達でもある。夏休み中は、従兄弟からもたらされる情報を心待ちにしていた。そして父親には言えず、かといってブシャイブにも頼めない用件、例えば、言伝や父親に隠しておきたい買い物、情報収集を、彼らに頼んでいるようだった。彼らもいわば伝達係兼、買出し係兼、使い走りなのだ。

#### 四 家の外

中庭式住宅における居住形態の調査が本来の目的だったにもかかわらず、中庭を有した住宅自体が減少していた。現に、私の居候先は全て中庭を持たない集合住宅だった。中にはラティバ宅やアブダッラーの生家など、親類宅の中には中庭を設けた伝統的な住宅もあったので、訪ねることができた。<sup>(11)</sup>他にも、マフムードの手引きにより、飛び込みで見せてもらった家もあった。けれども、私が実際にそこで暮らしたわけではないので、本稿では居候先三家族の居住形態に記述をしばった。【見取り図参照】

家にいることが多い女性たちにも、とっておきの場所が二つある。

一つ目はハンマーム（公衆浴場）だ。マフムード宅にはシャワーがないため、三、四日おきにここへ足を運んだ。公衆

浴場といっても、日本の銭湯とは様式が異なる。ハンマームに浴槽はないので、湯船に浸かることはない。そこは読んで字の如く「浴場」で、汲んだ湯を洗面器で浴びるのだ。また、ここでは全裸は許されない。イスラーム法の規則で陰部は必ず隠すことになっているからだ（隠さなくてもいい、とする説も聞いたことがあるが、参考文献でご確認ください<sup>12</sup>）。

女の長風呂は日本とモロッコも一緒である。ここでは、丹念に洗髪した後、キース（垢すり袋）を使って互いにこすりあい、一旦外へ出て休憩すると再び中へ入る。よって、平均二時間は居座っている計算になるうか。十代前半のリダとナフィーサに案内されて昼過ぎに行ったときは、髪をしゃしゃか、身体をこしこし洗い、三人でツルツルの床を滑って遊んで怒られて、計一時間ちよつとだった。朝早くに寝ぼけ眼をこすりながらナミアとともに行ったときは、終始ゆつくりの行動で、所要時間は二時間程度。余談になるが、彼女は次から次へと肌に何かを塗り込んでいた。少量で鮮やかに発色する赤い粉や、灰のように真っ黒な物質、飴色でプルプルした石鹸、など一風変わった美容品に興味をそそられた私は、それを分けてもらい塗ってみたりした。これら美容品については後述する。

最も時間を要した回は、夕方、イクラムとファティマに連れられて行ったときである。三時間近くもハンマームにいた。洗髪、垢すり、すべてにおいて余念がない。さすがに二時間を過ぎると「まだか？」と急かしてしまった。カサブランカでは、ハキーム宅にシャワーがついていても（さすがに大人数が使うのは大変だが）、女性たちは同様に長時間、せっせと体を磨いていた。

混雑する時間帯に行くと、老若ひしめき合っている。子どもが暴れていたたり、泣き声をあげていたり、まさにてんやわんやの賑わいだ。活気があり、これはこれで楽しいのだが、その分、疲れもする。ハンマームはずっと昔から続く女性の社交場で、姑が嫁候補を選ぶ場所でもあったようだ。確かに、着飾った状態で会うよそ行きの顔よりも、生身の体で対峙するときの素行を見た方が縁談の参考になるだろう。逆に、空いている時間帯だと、中は閑散としている。早朝の静かなハンマームは、天井の小さな明り取りから陽がもれ、あたかも貸切プラネタリウムのようにであった。この時間帯を好んで

通っていたナミアの心境には、連綿と続く子育てと人付き合ひの合間に、一人でゆつくりしたい気持ちがあったのかもしれない。そうしてハンマームから戻ってくると、女性たちはさぞ一仕事してきたかのごとく、くつろいでいる。まわりも「健康を！」（ラーイ・アティックスハ）と声をかける。ハンマームに行くことは一大行事であり、女の特権なのである。マフムードも「女の長風呂はしょうがない」と諦めていた。

二つ目はスタッ（屋上）である。マフムード宅は三階建の二階にあり、スタッは四階にあたる。<sup>(13)</sup>中庭がない分、スタッも広いので各家で区切って使用していた。ここは、もと洗濯物を干す場である。中庭のない住宅ではスタッに出ない限り、空を見ることが出来ない。マフムード宅では娘たちが足繁くスタッへ通っていた。特にファティマはここに多くのことが多く、彼女の居場所を尋ねると、人さし指を上に向け「スタッ」と回答するポーズが定着していた。他の娘も、ひそひそ話をするときはここに来ていたようだ。

ここは、直に情報をキャッチするにはもってこいの場所だ。伊達にパラボラアンテナがあるわけではない。スタッ越しに話することが可能であるし、何よりも高い位置からは下の景色がよく見える。こうして仕入れた情報をスタッからスタッへ発信する。「ラジオ・スタッ」との名前を戴くだけのことはある。あるいは、室内では男性に聞かれる恐れがあつて話しづらいことも、スタッでは盗み聞きされる危険が少ないため、ここへ着いてから打ち明けられるのだ。他所のスタッにおける光景だが、夕暮れ時に若い男女が見つめ合っていた。両者、各自のスタッに一人きりである。しかし、その様子を我々が傍らから眺めていた。同じように、彼らを垣間見ているスタッが他にもあった。おそらく、この一部始終は、女性のネットワークを介して近所に知れ渡っていくのだろう。

「男が足を踏み入れるのは、パラボラアンテナの位置を変えるときぐらいだ」とは、ある男性の言葉である。スタッは、女性の縄張りであり、女性の避難場所でもある。男女の領域分離を正当化する理由は、女性が男性の領域に入ると秩序を乱すことになるからだとされているが、その逆もしかりなのである、と書きたいところだが、それでは見つめ合う男女の

説明にはならない。ここが、どの程度までハレム（出入り禁断の場）なのか、いずれ明らかにしていきたい。【写真3 マフムード家のスタッ】

ライラの家は築三、四年という高層住宅で、周りにも同形の高層住宅が林立しており、日本という公団住宅のような形態だった。ヌズハの家は新築マンションの五階で、ライラ宅の建物より小ぶりだった。日本というマンションである。どちらの場合も、カサブランカの郊外に位置し、また住宅の規模が大きく世帯数が多いため、マフムード宅のようなスタッの使い方は見られなかった。

## 五 ケの日、ハレの日

ここまで、女性たちのいわば「ケの日」を描写してきた。社交も狭い範囲ではハレの部類に入るかもしれないが、日常的に行われていることを考慮すれば、広い範囲のケである。

「人の家を訪問する」には、「ジャーラ」を使うとALIFで習った。しかし、女性たち、とくにイクラムは、そちらではなく「サロン」の方を用いていた。サロンはフランス語で「客間、応接間」「個人の邸宅で貴族や芸術家などが集まる場」「店、室」を意味し、アラビア語でも生活上ほぼ同様の意味で使われている。見取り図にもあるように、これは居室の一つの名称である。日本という居間、応接間の感覚だ。社交はここで行われるから、「サロン」の一言に、アツツアイを飲み、菓子を食べ、おしゃべりをし、情報を交換し、あるいは人脈を築くという内容が含意されていることになる。<sup>(14)</sup>

同時に、サロンは寝室でもある。ソファをびっしり置く理由はここにある。アラブ式のブロック型ソファは組み立て次第で変形でき、横広くしたり、縦長くしたり、応用が利く。また、日中は椅子に、夜は寝床となるのだ。ただ、幅がせまいため、慣れていないと、ソファから落ちてしまう。マフムード宅では夏にソファを片付け、床にシーツを敷いて寝た。

これは、床の方がひんやりして気持ちがいいからである。ソファだと暑苦しくて、とてもじゃないが眠れない。なお、独立した個室である夫婦の寝室には、ダブルベッドを置いている家が多かった。

次に、ハレの日に目を転じてみよう。

七月十一日、ヌハイラの誕生会が開催された。幼児の誕生会なのだから、当然、昼に開かれると思いきや、開始は日没後。最高潮に達したときは、夜の十時、十一時だった。民族衣装をまとった十代後半の青年盛り上げ師が四、五人来て、楽器を手に歌を合唱したり、かけ声を上げたり、早い話、どんちゃん騒ぎである。また、運び込んだ機材でアラビアン・ポップミュージックを流しているため、重低音がズンドンズンドン、振動となって家屋に響く。かたや喉鳴らしのけたたましい高音がこだましている。サロンは居間から一転、ダンスホールの様相を呈していた。

加えて、近所のお年寄りから幼児まで総勢七十人以上が招かれていた。民家にこれほどの人数が押し寄せれば、さすがに人口密度は高くなり、主室のサロン三つは、えもいわれぬ熱気と興奮に包まれていた。年配の女性はソファに腰かけ、談笑している人が多かったが、中央で踊りを披露する淑女もいた。宴も終盤にかかると、疲れて騒ぎを眺めている人や食べればかりの人、寝てしまった子どもなど、うるさいながらも人それぞれだった。

このような「祝祭」に穿った見方をするならば、ヌハイラの誕生会にかこつけてパーティーを開きたかっただけなのかもしれないと、推測することができる。しかし、思いがけない「お祭り」は非常に楽しかった。開始直前までキャーキャーいいながら服をとつかえひつかえしては鏡に映して選ぶ様子や、来客にはしゃぐ娘たちの姿は、学園祭で盛り上がる日本の女子学生を彷彿させた。

誕生会の規模の大きさには面食らったが、これよりも大きなハレの日がある。それが結婚式だ。ハンマーム同様、結婚式は出会いの場である。ここでは男親も嫁候補を物色できるため、親類縁者が集まる結婚の重要性は大きい。地域によっては男女別々に披露宴を行うところもあるようだが、私が見せてもらったビデオ映像では、親類縁者が男女交々、同室内



で踊っており、また戸外でも同じ行列で練り歩いていた。

モロッコでは結婚によって女の一生が決まる。そして、その縁談は親が取り仕切る<sup>(15)</sup>。結婚は親族の結束を強め、結婚相手如何で後の人生が左右されるからだ。ハキーム家の次女アイーシャの縁談は次に説明する経緯で進んだ。

同じマンションに住むある女性が彼女のことを高く買っていた。容姿端麗で健康そうだ。家にはそれなりの経済力がある。モロッコの規範に則ったしつかりした教育もなされている。その住人はアイーシャをアメリカに暮らす自分の身内（義弟）の嫁に推した。そうこうするうちに家の条件も一致し、婚約、結婚と進んでいった。しかし、婚約当時十五歳（彼女は一九八四年十月生まれ）のアイーシャは高校を中退しなければならず、またフランス語の教育を受けていた彼女は、ブリティッシュ・センターに通って英語を習ったという。私が会ったときは里帰り中だったので、羽を伸ばしている様子だった。そこで、彼女に結婚に関する質問を試みた。

Q .. 十六歳の結婚は早くないか？

A .. そんなことはない。母も十六歳で結婚した。

Q .. 結婚前にボーイフレンドはいた？

A .. いいえ。

Q .. ボーイフレンドを持ちたかった？

A .. モロッコではそんなこと考えられない。

Q .. 婚前性交渉についてどう思うか？

A .. それは結婚後にあること。

Q .. 女性は家にいるべきか？

A .. そうだ。モロッコの女性は子沢山だから。

Q .. 子どもは何人欲しい？

A .. 二人欲しい。

学校のマドンナ的存在で、勉強もできたというから退学はさぞかし無念だったろうと、やや誘導してみたこちらの問いに、彼女は「確かにそうだが、自分の結婚を誇りにしている」と答えてくれた。嫁ぎ先では年少であるため、姑や義理の姉から可愛がられているという。彼女自身も夫の家族を気に入っているようだった。残念ながら、私の滞在中、夫は仕事の関係でアメリカに残っていたので彼と会うことはできなかった。<sup>16</sup>

## 六 取捨選択

マフムード家の末っ子ヤッシンには相当やられた。紙を破られ、物を壊され、疲労困憊で寝込んでいるときも顔をバシバシ叩かれて起こされた（どうやら心配してくれたらしい）。ある日の夕方、家中の角という角にミルク（ハリーブ）がこぼれていたの、また彼の悪戯かと思い、雑巾で拭こうとしたら、私のほうが止められてしまった。これは魔除けの儀式だったのだ。独力で用が足せるようになった彼も、一人ではまだ心細いのか、便所まで同行しろと私に要求してくる。

成功すれば一安心。だが、失敗すれば後始末が私の仕事になる。無邪気に走り去ってゆく彼を目で追いながら、掃除に勤しんだ。

モロッコの便所は、水洗である。一般に日本人が想像するであろう水洗便所は、レバーを押すと水が流れる様式だが、アラブ式は自分で蛇口をひねってバケツにためた水を流す様式だ。マフムード家を訪れた日本人は口をそろえて「あれだけは、どうも」と弱りきっていた。アラビア語で便所を指す「ビーツ・エルマ」の方は、直訳すると「水の部屋」になることから、それが「水洗」を象徴している。マフムード家の物置に、便座式便器が置いてあった。これを取り外して、旧来の型を取り付けたそうだ。このアラブ型は、ハキームの家、アブダッラーの家でも使われていた。取り外された洋式便器から読み取れることは、彼らが、新式として一旦は受け入れたものの、やはり馴染めなかったので排したという取捨選択である。

ここで、便所に関連して、生理事情を紹介しよう。私は、生理を公にすることは禁忌とされているに違いないと思いついでいた。だが、そんなことはなく（かといって開けっ広げにしていたわけではない）、生理を不浄と忌み嫌う傾向は見られなかった。<sup>(17)</sup> ナプキンは商店で他の商品と同様に陳列されており、ビスケットや洗剤などの横に位置している。それほどばかりか、新商品のCMが日本並にテレビで流れていた。

ちなみに、少女が外出を控えだす基準は初潮にあるらしい。しかし、正確なところはわからない。既に初潮を迎えたナフィーサとリダであるが、お使いなどのちょっとした外出を厳しく制限されている様子はなかったし、外出時にジュラバを着用していないこともあった。ジュラバとはモロッコ独特の服で、フード付きのコートである。ヒジャーブ（ヴェール）で顔を覆った姿はあまり見かけなかったが、七、八割程度の女性はジュラバを着ていた。これは便利なひっかけ服なのだ。特に夏は、家でノースリーブや短パン姿である。その上に薄手のジュラバを着れば着替えずともよいし、紫外線防止にもなる。

適齡期になると、やはり周りも敏感になるようだ。長女イクラムと三女ファティマは学校へ通っていない。家事手伝い、といったところか。イクラムは学業を終えたとしても、ファティマはまだ十五歳だ。けれども、彼女より年上の次女ゼイナブは高校へ通っている。その理由を聞いてみた。ファティマの弁では「私は体が大きくなってしまった。だから父が、もう学校へは行かなくてよいと言った。ゼイナブはやせているので、学校へ行っている」。つまり、こういうことなのだろう。ファティマは肉付きが良かったために大人びて見える。身体が適齡期になったからには学校へ行く必要はない。

周囲の対応と相まって、妙齡になると美容への関心を示す。彼女たちから仕入れた情報を整理したところ、理想的な女性の容姿はこうなった。ふくよかで、胸が大きいこと。ウエストがくびれている、すなわち、グラマーであること。やせている（ラキーク）女性は、色香がないのでよくない。もちろん肥満（タツポーザ）も良くない。髪は長く、まっすぐで、艶のある滑らかな状態が望ましい。

唇が荒れたときに薬局ではなく、昔ながらの薬屋へ行つて塗り薬を購入した。私は、女性たちに漢方薬の匂いを発する伝統的な軟膏を満足げに見せた。ところが彼女たちからは、

「何でこれを買ったのか。日本にはいい薬があるではないか、こちらの方が効くのに」

と、日本製のメンソレータム・リップを突きつけられた。シャンプーも、ボディクリームも日本製が良いとのこと。このときは、彼女たちは科学進歩至上主義なのだと感じた。

しかし、日本製美容品の性能をたたえていた彼女たちではあるが、なにも「新しいことはよいことだ」と考えているわけでもなかった。早朝、目が覚めるとナミアが泥のような物体を濾している。ハーブなのだろうが一見した所、かき集めた落ち葉のようだ。彼女に説明を求めると、伝統的な手作りのパックだと教えてくれた。

カサブランカの名所を観光した帰り、案内してくれたアブダッラーらと港へ寄つて、獲れたばかりの魚介類を買い込んだことがあった。イカの腸をのぞいたり、魚のうろこをとったりと、女性軍総出で魚介類をさばっていく仕事は、魚屋さ

ながらの作業であった。そうして調理されたご馳走の中でも、蟹を煮込んだパエリア風の雑炊が絶品で、濃厚な出汁と絶妙なスパイスの調合に舌鼓をうった。秘伝のこつがあるにちがいない。そうならんだ私は、ヌズハに迫った。かくし味は何か。彼女が見せてくれた物は、クノールの固形スープだった。

新たなモノに魅力を感じつつも既存のよさは残す。良さがあるのなら取り入れる。よく考えると、これは至極当たり前のことである。こうした取捨選択の基準がどこにあるのか、今後、追求していきたい点である。

## 七 ヒステリー

モロッコ滞在中、私は三回ほどヒステリーを起こした。

一方的な興奮状態であるヒステリーは、二者以上で行う喧嘩とは意を異にする。私の場合もまさしくそうだった。それは海外生活における圧迫感から生じたストレスの発露、あるいは異議申し立ての感情発作と分析できるかもしれない。しかし、とどのつまり、単なる癪癢なのだ。だいたい、居候させてもらっている身分のくせに喚き散らすとは、随分と生意気な話ではないか。

三回のうち最も大きなヒステリーがマフムードに対してであった。

その日は日本から観光に来ていた女子大学生も居候しており、私たちはマフムードを交え、英語で世間話に興じていた。そのうち、やおら人生を語りだしたマフムードは、日本人の小娘二人にモロッコにおける男性優位の風潮が正当であると強調したかったのか、はたまた自分の父権を誇示したかったのか、あからさまな女性蔑視論を繰り広げはじめた。

彼の女性軽視発言は何もそのときが初めてではない。折に触れ「女はダメだ」「男は偉い」を力説していた。だが、その背景には「男は外で懸命に働いて金を稼いでいるのに、妻はその苦勞も知らずに無駄遣いをする。金が沸いてくるとで

も考えているのだ」との愚痴や、「女は弱い存在なので男が守らなければならない」とする責任感があつた。また彼の妻は誰が見ても良妻賢母であるから、身近な人への直接的な揶揄でもなかった分、一意見として耳に入つた。また、私としても現代のモロッコで家長たる男性がどのように考えているかを知りたかつたので、興味深く聞いていた。

しかしそのときは、彼の持論がだんだんと加速していき、ついには「女房なんて猫と一緒にだ」との結論へたどり着いた。理由はこうである。妻は夫の金で暮らしているので、飼われている猫と一緒にだ。おまけに飼い主たる夫が見張ってないと、怠ける。浪費をする。ふらふら出歩く。浮気をする。わけのわからない者の子供を宿してくる。まったく、監視がなければ何をしでかすか分かつたものではない。女はもともと能力が低く、浅はかなのだから、能力に勝る夫は妻をコントロールしなければならない。

どうにも納得できない彼の主張に、私は途中から相槌をうたなくなった。おそらく、引きつった表情で憮然としていたのだろう。それを察したマフムードは「君は俺の英語を理解してないのだな」とからかってくる。彼の挑発に反論しているうち私は独り興奮してきて、怒り心頭に達してしまった。

「Don't look down on me !」

そう言つて捲くし立てたところまでは定かだが、あとは両手を使ってわめいたことしか記憶にない。俗にいう「キレる」とはこういう状態を指すのであろう。海千山千の彼も、温厚な日本人のヒステリーには驚いたらしく、まあまあ落ち着いてとだめてきた。

その後も、何度か彼の「女はダメだ」発言を耳にした。家族全員のことを掌握し、人一倍父権を具現化してみせようと努める彼は肩こりも凄まじく、岩のようである。肩を揉みながら「男と女は支えあつて生きているのだ。もっと肩の力を抜いてみたらどうか」と諭したところ、あきれた顔でこう返された。「こんなんだから、世の中は悪くなつていくんだよ。だめだ、男がしっかりせねば未来はない。」

彼の極論を糾弾する事はたやすい。けれども、女性の側に「男なのだからしつかりしてよ」という姿勢がある間は、男性に権力と重責が集中してしまう。現段階において男性の側にも言い分ある限り、それを無視して理念だけの改革をとなくても実行力をともなわないだろう。イスラーム世界におけるジェンダー研究は今後議論がより活発化するだろうし、私も取り組んでいきたい課題でもある。

## おわりに

モロッコの現状に不満を漏らす人が多い<sup>(18)</sup>。

なканずく、マフムードの不満は大きかった。「モロッコの文化や歴史は大好きだが、今のモロッコに未来はない」、この不満を口にする彼／彼女の言説からは、自国への憂いがそこはかとなく漂っていた<sup>(19)</sup>。自国への不満は国外への逃避願望に繋がる。そして、この意識は子どもたちにも共有されていた。その先として、イクラムとナイーマはヨーロッパへ行きたいと考えており、その中でもドイツかオランダを出稼ぎ先に希望していた。もちろん、まだ父親には打ち明けてないという。イクラムは父親からお金をもらう生活ではなく、自立したいと考えていた。おまけに車を運転したい。

「車の免許は役に立つとユウコから父へ話してくれないか」

彼女の陳情に応え、マフムードに伝えたところ、即、却下された。「そんなお金はない」と一蹴されたのだが、これには、車の入れない旧市街に居を構える彼が車を所有していないことも理由の一つだろう。一方、手先が器用なナイーマに、その特技をいかすべく専門学校へ通ったかどうかと勧めてみた。しかし、「父が許してくれないだろう」との返答だった。

スタッフでも触れたが、外の世界に対する女性たちの関心は高い。そして、その様子は窓への接近回数にも表れている。マフムード家の少女にとって、窓は外の出来事を知る手段である。彼女たちは通り（ザンカ）で起こっていることをのぞ

き見る。ささいなことでも、何か事件がおこると、外で遊んでいたブシャイブが走り帰ってきて、皆に知らせる。彼を待たずとも、騒ぎの音が大きければ、窓へ駆けつけ事件を詮索する。

小さな窓に群がり、外をのぞき見る姿はじゃじゃ馬そのものだが、窓の外で繰り広げられる事件は退屈な日常に話題を提供してくれるのだ。つまり、これは外への欲求のあらわれなのだ。窓に直行するその速さは、外の世界へ踏み出したいという気持ちを表現しているのではなからうか。【写真4 マフムード宅の窓から見た風景】

帰国して卒業論文を書く頃には、もとは中庭にあった関心の所在が女性の問題まで拡大し、ハレムの語源、さらには「近代家族」に頭を悩ませるようになっていた。

そもそも私がイスラーム世界に関心を持ったきっかけは、彼／彼女らに対する「恐怖」と「警戒」だった。不可解であるがゆえに、恐れや敵愾心を持つに至る精神構造は、その実、無知によることが多い。では、どうすれば警戒はとけるのか。自身の反省をもとに、現在私が有効だと考える方法を提示してみたい。

一、先入観を捨てること。これは案外難しい。私は、対象に対して身構えすぎた挙句、一人相撲だったことが少なからずあった。固定観念を自覚しているならば話が早いが、それが無意識の産物である場合、容易に払拭することはできない。また、先入観や固定観念は術学的要因から発生することが多い。よって、これらの点に留意しておく必要がある。

二、彼女たちの声を聞くこと。とにかく生の意見を、それもあるべく多くの人から聞くことだ。女性をめぐる言説も様々である。イスラームを核とした共通点、あるいはアラブを基調とした類似点はあっても、地域や経済背景、置かれた立場と境遇から意見も異なってくる。ましてや、一人一人性格が違うのだから、同じであるはずがない。

三、そして彼女たちの声に秘められた思いを読み取ること。思考回路をたどり、構造を分析すること。これらは研究者の努力如何で十分可能である。そうすれば、納得できないことが残っても、不可解ははるかに軽減する。

人類学であれ、歴史学であれ、社会学であれ、数多の学問は客観に立脚している。客観的であろうと努める姿勢は必須



であるし、それを前提条件としていなければ効力を失ってしまう。しかし、主観から逃れることはできないのだ。ならば、異文化を表象する場合に限って言えば、対象に対する共感があった方が望ましいのではないだろうか。

私の場合、ばたばたと出発が決まり、準備が不十分だった。しかし、悠長に構えていたならば、今頃も机上の卓論だったに違いない。そうして踏み入れたモロッコで待ち受けていた、アツツアイの洗礼。ガイドブックに「乾燥した気候のもとでは、喉が自然に砂糖の甘さとミントの爽快感を求めるようになる」と書かれていたが、なるほど、一理ある。

私は、いろんな場面でアツツアイを飲んだ。場面に応じて名前をつけてみよう。お客に淹れる、もしくはお客として出される「もてなしアツツアイ」、家事を一通り終えた後の休憩に飲む「一息アツツアイ」、昼食の仕上げ「満腹アツツアイ」。私が最も気に入っている飲み方は、黒オリーブの実と、クリームチーズ、モロッコ流炒り卵にホブズの朝食と一緒にいただく「午前中アツツアイ」だ。

最後にこのような機会を与えてくれたマフムード家、ハキーム家、アブダッラー家の皆に、心から感謝を述べたい。

## 註

(1) ここに挙げた了解事項は、堀内正樹「社会と文化…社会人類学から」三浦徹・東長靖・黒木英充 編『イスラーム研究ハンドブック』栄光教育文化研究所（一九九五）二三五—二三九頁を参考にした。

(2) 〈歴史をもつれあい〉は、杉島敬志「所有をめぐる歴史をもつれあい…アジア・太平洋地域における土地所有を中心に」『比較史の可能性』研究会 活動の記録 一九九九年 年度』に依拠した用語である。

(3) オリエンタリズムと異文化表象に関しては、大塚和夫「二人のエドワードと二〇世紀人類学…『当世エジプト人の風俗と慣習』と『オリエンタリズム』のはざままで」栗本英世・井野瀬久美恵 編『植民地経験…人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院（一九九九）三四六—三六五頁を参考にした。

(4) 財務関係の部署で、検査官 Inspecteur (mufatish) をしている。ハッサン二世大学を卒業したとのこと。

(5) 一九一二年、モロッコ南部はフランスの、北部はスペ

インの保護領となった。A L I Fのある講師はこれら一連の史実に触れ、「この年を境に生活様式がすっかり変わってしまった」との見解を示した。もともとスペインとは歴史的に相互作用があった。しかし、フランスの支配は単なるフランス文化の影響ではなく、「近代化」文化の移入であることに注意しなければならないだろう。一九五六年に独立したモロッコ王国は、現在、宗教的穏健または世俗主義の体制をとっている。首都は大西洋側のラバトで、商業の中心はカサブランカである。

なお、アラブ人が入ってくる以前からここに住むベルベル人は、ベルベル語を話し、人口の約半数を占める。彼らはイスラーム化しており、また生活習慣、文化ともにアラブと融合しているところもある。

フェズの旧市街は、その複雑な構造から、迷宮都市として知られている。一九八一年のユネスコによる世界遺産都市指定を機に、旧市街内部の再開発計画が実施された。イスラーム都市についての詳細は、Hakim, Besim Selim *Arabic-Islamic Cities: Buildings and Planning Principles*, London 2nd ed, 1988. [佐藤次高 監訳『イスラーム都市：アラブのまちづくりの原理』第三書館（一九九〇）]を、歴史研究については私市正年「アラブ（一）マグリブ」羽田正・三浦徹 編『イスラーム都市研究・歴史と展望』東京大学出版会（一九九一）一四―七七頁を参照されたい。

(6) フランス語とアラビア語モロッコ方言の融合にはかな

り惑わされた。お菓子の名前をきくと「ガトー」と教えてくれる。その時は、ガトーなるモロッコ名の伝統菓子を食べたと理解していたが、後にそれがお菓子全般を意味するフランス語であることが判明した。他にも、化粧がマキアージュ、台所がクジナなど、後から判明した言葉は枚挙にいとまがない。日本でも和製英語なるものがあるが、モロッコ製フランス語なるものに帰国後も悩まされた。

(7) 日本の大手企業が多国籍企業へと成長し、海外にその名を轟かすようになって久しい。今日、各社ブランドの名前を世界各地で目にするのは珍しくない。それはHONDAのバイクであったり、FUJI COLORの看板であったり、SONYの電化製品であったりする。日本製の性能のよさは巷間に流布し、made in Japanに対する憧憬は当地モロッコにおいても瞠目すべきものがあつた。同様に韓国企業の中東進出も盛んで、湾岸諸国における韓国企業の進出ぶりは注目に値する。モロッコでも、文房具店を覗いて見ると蛍光ペンなどmade in Koreaの製品が置いてあつた（もつとも、ほとんどの分野で一番のシェアを誇るのはフランスであるが）。しかし、急速でグローバルな物品の流れに比して、文化的交流は日本・韓国ともにモロッコではあまり活発ではないような気がした。JICA（国際協力事業団）の活動や私の見逃している交流もあるのだろうが、物の流れが人の流れの先を行っている感が拭えない。

(8) キリスト教もイスラームと同じく神を唯一絶対な存在

としているため。

(9) 私が知る範囲では、皆、本人の名前で呼んでいた。「ウナム・」(のお母さん)や「アブー・」(のお父さん)のような呼称を聞くことはなかった。

(10) イスラーム世界の女性にかんする議論では、宮治美江子「中東の女性研究の現状と課題」アラブ・ムスリム社会の女性を中心に『中東研究』三三二号(一九八八)一二—二〇頁、「イスラーム世界における祝祭と女性」「中東・イスラーム地域における家族とジェンダー」マグレブの事例を中心に『イスラームの都市性』全体集会報告書第三書館(一九九一)二七八—二九〇頁、四一七—四二三頁、「アラブ・イスラーム世界の女性と現代」板垣雄三・後藤明編『イスラームの都市性』日本学術振興会(一九九三)一七三—一九三頁、飯塚正人「ハーレムの外へ」北アフリカにおける女性の社会進出とイスラーム」山内昌之編『イスラーム原理主義』とは何か』岩波書店(一九九六)二五四—二七七頁、鈴木均ほか「シンポジウム」イスラーム世界と映像文化・映画・ジェンダー・文化接触』『イスラーム世界』五四号(二〇〇〇)における岡真理の発言、などを参考にした。

(11) どちらの中庭も網の天蓋がかかっていた。なお、中庭式住宅に関しては、陣内秀信「建築論」中庭型住宅の意味」山内昌之・大塚和夫編『イスラームを学ぶ人のために』世界思想社(一九九三)二五三—二七五頁、山田幸正「住

居空間のもつ意味」大塚和夫編『アジア読本 アラブ』河出書房新社(一九九八)八二—九〇頁を参照されたい。

邦語で読めるフェズの住宅研究は、山田幸正ほか「フェズのメディナに関する調査研究 八伝統的都市住宅」『日本建築学会大会学術講演梗概集』(一九九〇)、「フェズのメディナに関する調査研究 九伝統的都市住宅(二)」『日本建築学会関東支部研究報告集』(一九九〇)、「フェズのメディナに関する調査研究 十街路の分節」『日本建築学会大会学術講演梗概集』(一九九二)、今村文明『迷宮都市モロッコを歩く』NTT出版(一九九八)がある。

(12) ハンマームについては八尾師誠編『銭湯へ行こう・イスラーム編』お風呂のルーツを求めて』TOTTO出版(一九九三)、杉田英明『浴場から見たイスラーム文化』(世界史リブレット2)山川出版社(一九九九)を挙げておく。

(13) 中庭式住宅の減少は本文中にも書いた。現に、新たに建設されている集合住宅は、どれも中庭を持たない高層である。一軒家にしても、ヴィラの形が多い。高層集合住宅が建ち並ぶ中に、公園として中庭を設けている所もあるが、それは接触の場でこそあれ、日常生活の場とは言いがたい。中庭の減少には核家族化が影響していると考えられるが、この点は改めて検討したい。

従来の中庭は、最小単位の公共の場であった。一家あるいは一族で一軒を使うところもあれば、各部屋ごとに他人同士が賃貸で暮らしているところもある。ナミアが育った

中庭式住宅へ連れて行ってもらうと、中庭での会話は予想以上に響いていた。そこは住居人同士の関係が良好で、中庭に顔を出しては会話に参加していた。現在でもその家に暮らしているアマルとは、家族ぐるみの付き合いが続いており、二日に一度は遊びに来ていた。

(14) 美容院にも「サロン」の語をあてていた。フェズの美容院に行ってみたところ、男性の美容師に散髪してもらった。一方、アブダラー宅近くのビル一階に美容院があり、そこは女性の美容師がいた。

(15) 未婚女性をビンツというが、この言葉には処女の意味も内包されている。未婚は処女を前提にしているからである。それを証明する処女証明書は病院で発行される。「結婚前に誰かと性交渉をもつ可能性はある？」という私の問いに、冗談か本心かは定かではないが一樣に「父から殺される」と返ってきた。古くは、初夜に真っ白なシーツを引き、それについた鮮血で処女を証明していた。

(16) アイーシャは、もう一回式を挙げるといふ。残念ながら、それは私の帰国後だったので、出席することは叶わなかった。前回は小規模だったと言っても、写真やビデオで見る限り立派な式である。それに、新たに結婚衣裳を仕立てるとそれだけでもお金がかかる。憶測になるが、財力では勝る先方に対して誠意と実力を示すことで、親戚も含めた互いの「家」の結び付けを意図しているのではないだろうか。

(17) これには、マフムード家における女性の比率と、その全員に生理があることに起因しているのかもしれない。モロッコでは *bras* という商品が最も流通していた。なお、女性たちは生理に「ダム」の語を用いていた。ダムはアラビア語で「血」を意味し、そこから生理も指すようになったらしい。

(18) 「この国はダメだ」という言説はどここの国においても聞かれるものであろうし、モロッコ社会に顕著な危惧ではない。現に、日本における少子化・高齢社会・学力低下・低迷する経済などへの危機感には相当のものがある。ただ、モロッコの状況からは、貧富の格差や高い失業率（出稼ぎ先としてヨーロッパが頭打ちになってしまったことも関係している）のみならず、依然として高額な防衛費（西サハラ併合問題が原因）、恒常的に起こる観光客を狙った犯罪、近年深刻化するゴミ問題など、この国特有の閉塞状態が看取できる。

(19) ファーティマ・メルニーシーという著名な社会学者がいる。女性問題や民主主義について論じており、著書の『イスラームと民主主義』は二〇〇一年度三浦ゼミのテキストだった。国外では高い彼女の知名度も、国内では低いことがこのフィールドワークで判明した。ALIFでは彼女の本で盛り上がっている場面を目撃した。また、講師陣とも彼女に関する話題が持てた。しかし、一般大衆、それも女性たちの間では名前さえ知られていなかったのでは

る。彼女の代表的な著作は以下の通り。

- ・ *Beyond the Veil: Male-Female Dynamics in a Modern Muslim Society*, Schenkmann, 1975.
- ・ *Le Maroc Raconte par ses Femmes*, SMER, 1984.
- 「一部邦訳あり「女たちの語るモロッコ」藪田美恵子訳『現代思想臨時増刊号・総特集イスラーム』青土社、(一九八九) 七四―一〇九頁」
- 「テクノロジーの民主主義」奴田原睦明 インタビュー・訳『現代思想臨時増刊号・総特集イスラーム』青土社 (一九八九) 六八―七三頁。
- ・ *La peur-modernité: Conflit Islam démocratie*, Paris Albin Michel, 1992.
- 「『イスラームと民主主義：近代性への怖れ』私市正年・ラトクリフ川政祥子訳、平凡社 (二〇〇〇)」
- ・ *The Forgotten Queens of Islam*, tr.by Mary Jo Lakeland, Polity Press, 1993.
- ・ *Dreams of Trespass: Tales of a Harem Girlhood*, Perseus Books, 1994.
- 「『ハーレムの少女ファティマ：モロッコの古都フェズに生まれて』ラトクリフ川政祥子訳、未来社 (一九九八)」

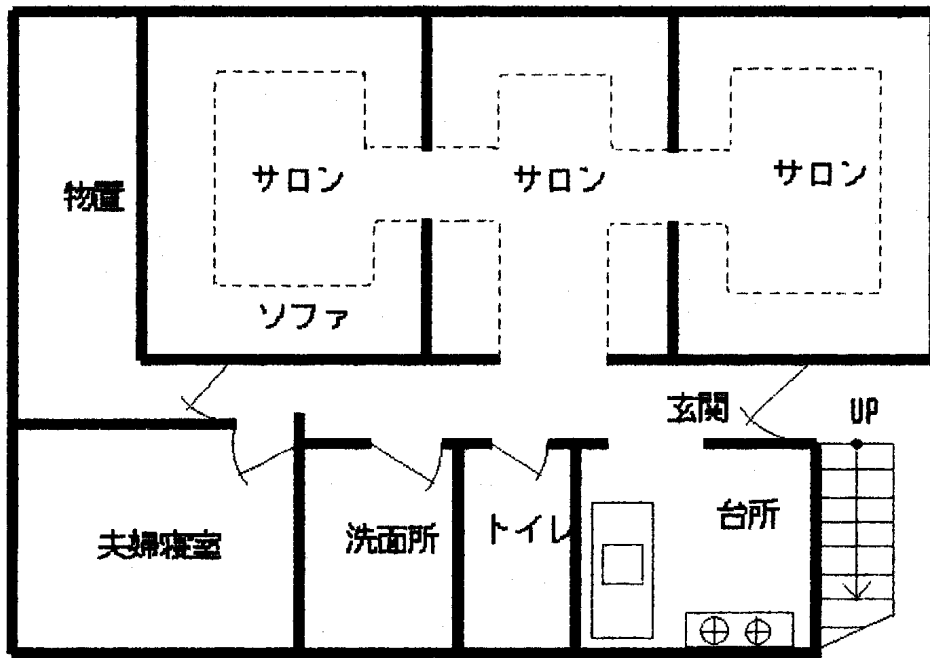
掲載写真は鶴留尚子氏が撮影したものである。

モロッコ入国に際して東京外国語大学の小池利幸氏、在仏の神藤智恵子氏のお世話になった。また、このモロッコ滞在経験を材料に、卒業論文をかたちあるものにする過程では、様々な方々に資料の教示や励ましを受けた。特に、お茶大の先輩である後藤敦子氏、三浦先生や安成先生をはじめ比較歴史学コースの先生方、並びに同級生の皆様にもこの場を借りてお礼を申し上げたい。

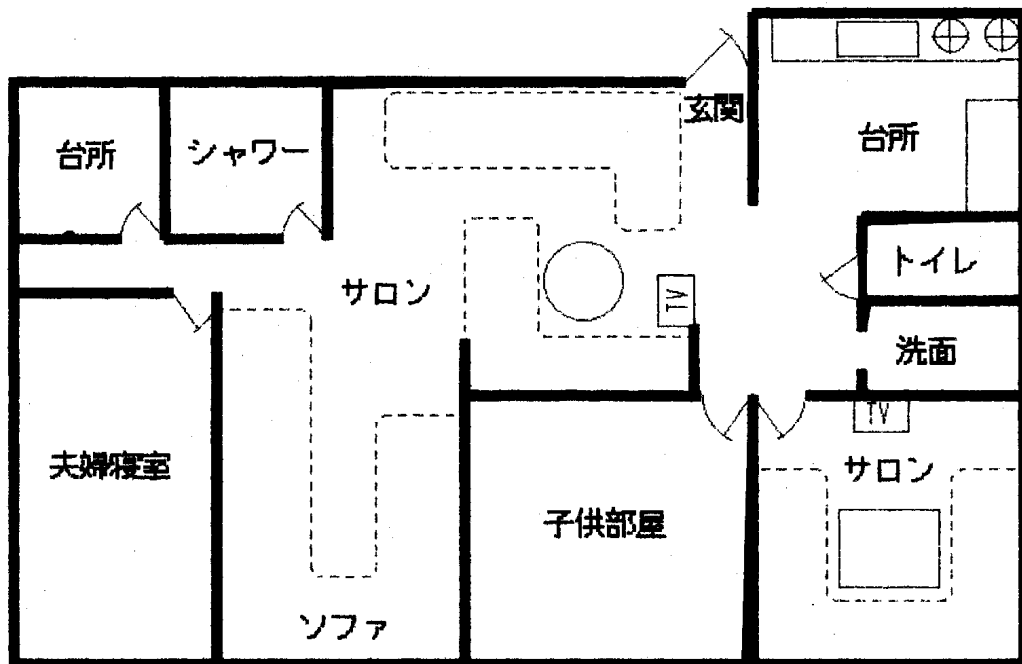
(お茶の水女子大学文教育学部人文科学科比較歴史学コー

ス平成十三年卒業)

# マフムード宅



# ハキーム宅



# アブダッラー宅

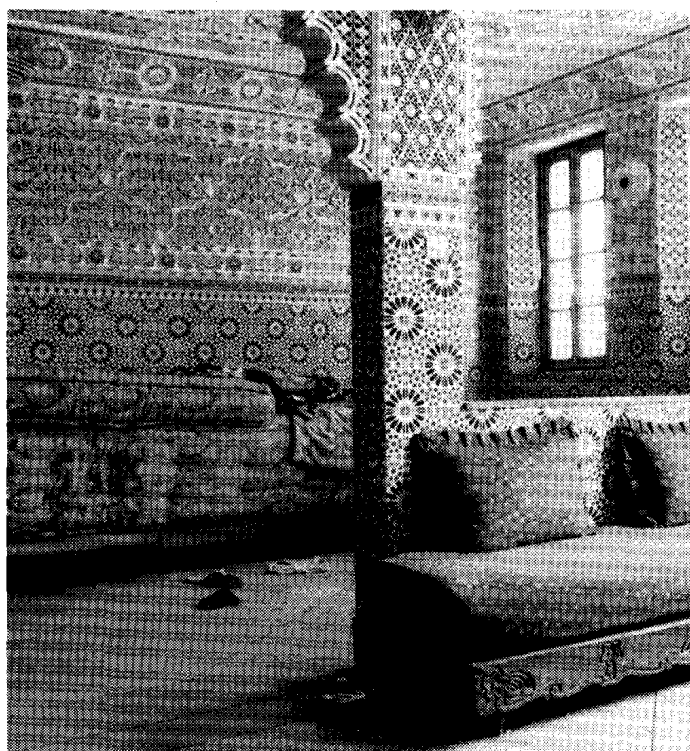
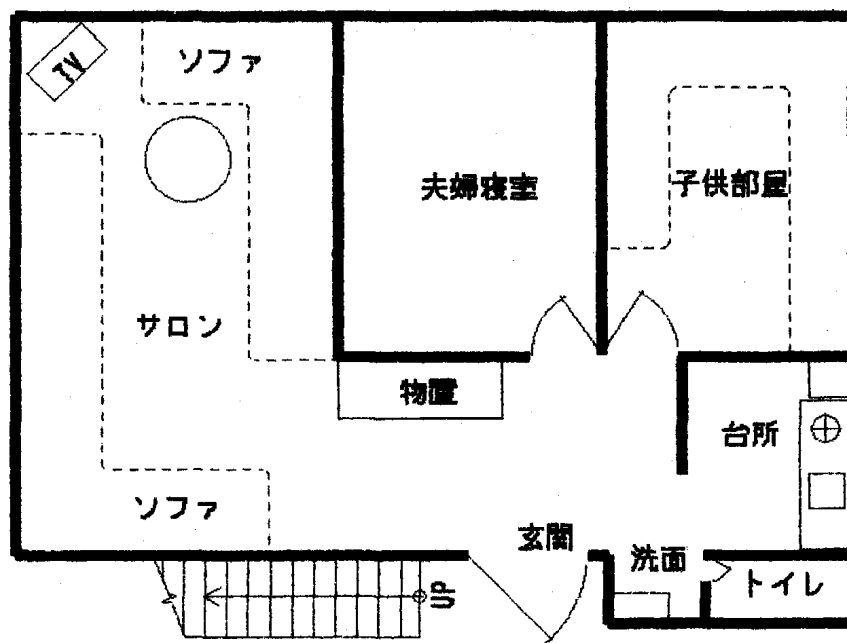


写真1 マフムード家のサロン マフムード宅では朴訥な外観とは反対に、室内には美しい装飾が施されており、その中でもサロンが最も華やかだった。また、どの家もサロンにはシャンデリアを設置している。ALIFの講師が言うには「シャンデリアがないとサロンとは呼べない」とのこと。



写真2 床掃除を手伝うヤッシン マフムード家の床掃除は、まず床を掃き、それから水で洗い流す（この時に洗剤液を薄めて用いることもある）。その汚水を水かきで便所か洗面所へはき出した後、軽く雑巾がけをして終了。なお、モロッコでは日本のように家屋内の一定位置で靴をぬぐ習慣はない。

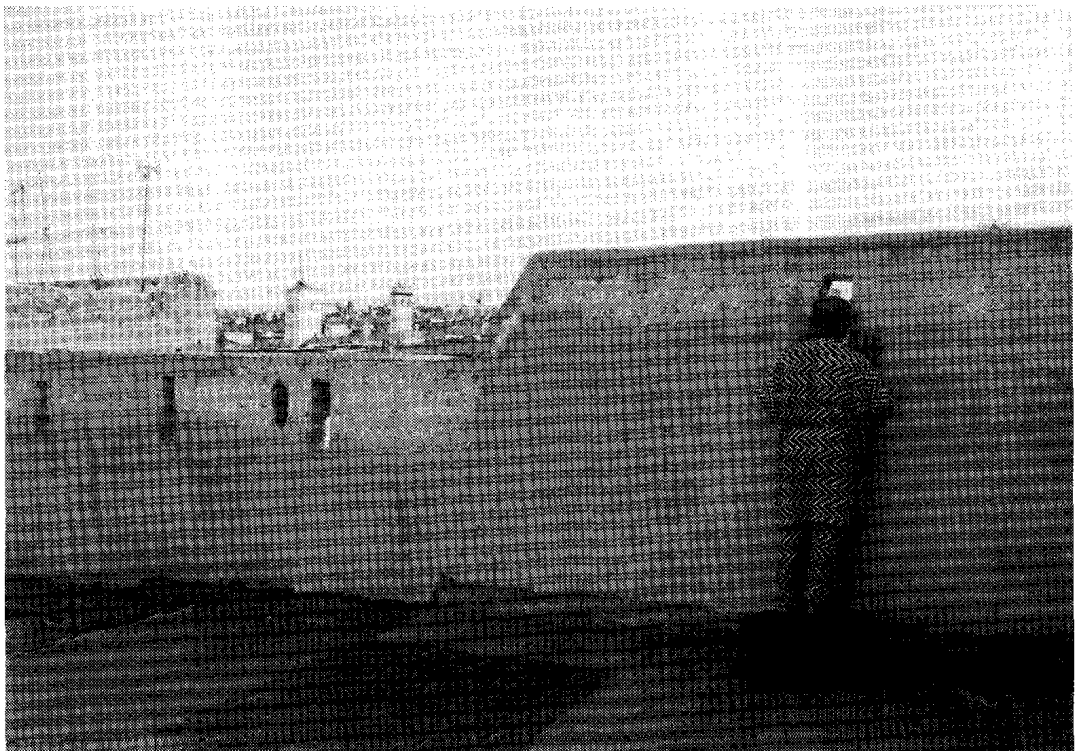


写真3 マフムード宅のスタッ どここのスタッでもパラボラ・アンテナを設置しているのが見える。多少の高低差はあるものの、メディナの住宅はほぼ同じ上限で建てられている。塀を高くしているのは転落防止のためだが、これには他所のスタッからこちらの内部を見られないようにする意図も含まれている。





写真4 マフムード宅の窓から見た風景 これはサロンの窓から、通り（ザンカ）の様子を写したものである。口論ぐらいになると何を話しているのかを聞き取ることは可能だが、立ち話程度だとその内容までは分からない。ハキーム宅、アブダッラー宅の窓は全開型で、マフムード宅のそれよりも大きく、外の様子がよく見えた。